

仏心と葬弁儀

―その7―

再起を賭けて離職を決意

不慮の事故で最愛の我が子を失い、しばらくは何も手に付かないほどの虚無感に襲われ、特に母親である芳栄といえは、はた目にも気の毒なほどの悲嘆に暮れる毎日を送っていましたが、唯一の救いはまだ二人が若かったことでした。やがてどちらからともなく「これからどうしよう」という話が持ち上がると同時に、「亡くなった秀巳のためにも、何とかして立ち直らなければ…」と、互いを励ましあいながら、再び生きる気力を取り戻していったのでした。

飛田はそのきっかけを、「勤めている会社を辞めて、一から出直す」とことに見出し、思いを妻に打ち明けました。もともと朗らかで芯の強い芳栄は、夫を信じてその提案に同意しました。夫が、これには訳がありました。

飛田は芳栄と結婚するとき、「今は一介のサラリーマンだが、遠くない将来、必ずや自分の会社を作って社長になってみせる。おれを信じて付いてきてくれ」と誓っていたためです。その後の生活でも、いったん決心したなら、やり通さずにはおけない飛田の気性が分かっていただけに、そんな夫の唐突な提案にも快く承知したのでした。

独立開業を決意したもの

「それでは、どんな仕事をしようか」。そう考えた飛田は、母親と秀巳の葬儀の時の、葬儀社の人たちの行き届いた仕事ぶりや思いやりを心に打たれたことを思い出しました。「もし自分と同じような悲しい思いをしている人たちを慰めることができるなら」と。同時に芳栄の胸にも「かわいそうな秀巳の霊を慰めることのできるような、人の役に立てる仕事がないか」という考えが浮かんでいました。期せずして、夫婦の思いが一致したのです。

こうして飛田夫婦は、愛児の死の悲しみを乗り越える道を、葬儀社の仕事に見出しました。しかし、葬儀社を始めようにも仕事をする上での知識などまったくの皆無で、おまけにサラリーマンの身では開業のための資金もほとんどありませんでした。

「正直言って不安だらけでした。妻がどう考えているかも気がかりでしたし」と、飛田は当時を振り返ります。しかし、「案ずるより生むが易し」のたとえどおり、解決の糸口は意外にも自らの足元にあったのでした。

つづく

■次回の掲載は三月二十八日(土)を予定しております。